

【問題】(演習)

出典：宇都宮輝夫『死と宗教』／東京大学 06年

文章略解

ほとんどの宗教が死者の存続する来世観を有する。社会の安定と存続は、生者同士のみならず死者と生者との間にも連帯があることを意識することで支えられる。人は過去の社会からの連続性の意識を介して死者の現在における実在を実感し、これと平行して死後における自己の存続も信じる。老いたものは自己の社会的使命を果たした後に後継者の生命を尊重して現世から退場することで現世の犠牲となり、来世に生きることを期待される。

解答

- (一) 人々は、過去の継承による現在の社会の存続を死者の生者に対する作用と受け止め、死者の実在を実感するという事。
- (二) 人は、自らの死後も存続するはずの現実世界に生きるであろう人々を意識し、その人々に有益になるように行為するという事。
- (三) 現在の社会の安定は過去からの連続性に支えられるため、生者がそれを意識できなければ社会の安定が損なわれるから。
- (四) 先行者が後継者の生を尊重することが、社会の存続のために自己の生に対する利己的な執着を克服することになるから。
- (五) 社会の安定という世俗的価値理念は先行者からの継承という過去志向の意識で支えられ、犠牲という宗教的価値理念は来世の自己

が現世の社会に作用しうるといふ未来志向の意識によつて支えられる。この両意識に連続性の觀念が共通するといふこと。〔113字〕

(六) a || 沈殿 (沈澱)

b || 儼然 (儼然)

c || 要請

d || 従容 (縦容)

e || 克服

現代語訳

「観音さま、）どうして（この私を）お助けくださらないのでしょうか。（もしも私が）高い地位を望んだり、多くの財産を手に入れたがったりしているのなら（話は別）ですが、（私にはそんな分不相応な願望などありません、）ただただ今日いただいて口に入れ、命がつかぬだけの食べもの（で十分ですから、御霊験でどこからかそれ）を見つけて（私に）お恵みくださいませ」と（修行僧が）お願いしているときに、（そのお堂の）西北の角で（壁が傷んで）隙間が空いている（ところ）に、狼に追われている鹿が入ってきて、（修行僧の近くで）倒れて死ぬ。そこでその修行僧は、「（この鹿は）観音さまが（私に）お与えくださった（もの）である」と見える」と（思い、）「いっそ食べてしまおうか、どうしようか」と迷ったけれども、「長年にわたって観世音菩薩におすがりしながら仏道修行に勤しむことも、やっと（ここまで）年月が重なってきた。（そうだというのに）どうしてこ（の鹿の肉）を慌てていきなり食べることができようか（、いや、ここまで守ってきた不殺生戒を破るような真似はできない）。（これまで自分が）聞くところによれば、（この世の）生き物はみな（自分の）前世における両親（の生まれ変わり）である（というではないか）。私とて食べものが欲しいとはいふものの、（どうして）親の肉体を切り裂いて食べてよいことがあるか（、そんなことをしてよいはずもない）。生き物の肉を食べる人は、せつかくの仏性（ぶつじょう）」「人それぞれの中と与えられている成仏の可能性」を自ら捨て去って、地獄に落ちる途上にいるのだ。あらゆる鳥も獣も（そんな非道の人を）見るなら走って逃げ去ったり、怖がって騒いだりする（ものだ）。（ということはきつと、私がこの鹿の肉を食べ（てしまえば）菩薩さまも（私を縁無き衆生と見限って）お見捨てになるに違いない」と思いはしたのだけれども、現世に生きる人間の悲しい（性である）ことには、（修行僧は）来世に背負うことになる罪障のことも考えることができず、ひたすら今生きているあいだの（飢えの）辛さを我慢しきれずに、（とうとう）刀子を抜いて、（さきほどの鹿の）左右の肉を切り取って、鍋に入れて煮て食べてしまった。その味わいのおいしさといったら（言葉に）尽くせないほどである。

そうして（修行僧が肉を食べているうちに）、ひもじさも消えてしまう。（また）精力もついて（ふと）正気をとりもどす。（そうなつてやっと修行僧は）「とんでもなく呆れ果てたことをもしてしまったものよ」と思って、（自分の情けなさのために）泣きたいような気

分で(その場に)へたりこんでいるうちに、人々が大勢やってくる音がする。(修行僧が息を潜めて)聞いていると、(近づいてくる人々が)「この寺に籠っていたお坊さまはどのようになつたことだろうかのう」、「だれかが(山寺と村とを)行き来した足跡も見あたりぬぞ」、「この雪ではもう)お召し上がりものもなからうよ」、「(寺の中に)だれかいるような気配もない(ということ)は、ひよっとすると(お坊さまは)お亡くなりになつてしまつたの(ではあるまい)か」と、それぞれに言う声がする。(それを聞いた修行僧は)「この(鹿の)肉を食べていた跡をなんとか取り繕つて隠そう」などと思うのだが、どうしようもない。(それでも修行僧が未練がましく)「まだ(肉が)食べきれずに鍋にあるのも(村人たちに見られては)みつともない」などと思つているうちに、人々が(お堂の中に)入つてきた。

(死んだかと心配していた修行僧を見て喜んだ村人たちが)「お坊さまは)どうやってこの数日を(過ごして)いらつしやいましたか」などと(言いながら)、あたりを見回すと、鍋に檜の切れ端を入れて煮て食べた跡がある。「なんとまあ(驚いた)。(いくら)食べものがないからと言つても、木をどんな人が食べるものか(「普通なら木なんか食べる人はいないよ)」と言つて、(はじめのうち人々は修行僧のしたことを戒律に厳しく従う崇高な行為と勘違いして)たいそう感動していたのだが、(ふと)村人たちが観世音菩薩像に目を向け申しあげると、(菩薩像の)左右の太ももを生々しく抉りとつてある。(それを見た村人たちは)「こ(の真新しい傷跡)は、この坊主が喰いやがつたのだ」と(思つ)て、「まったくんでもないことをなつた坊さんだよ。どうせ木を切つて喰うんだつたら、柱なり(何なり、そのあたりの木を)割き削つて喰つときゃよかつたのに。(あなたは坊さんのくせに)なんでまた仏さまを傷つけ(るような真似を)なつたのかねえ」と(修行僧を)責める。(そう言われて)びっくりして、その修行僧が(観音像を)お見上げ申しあげると、村人たちの言うとおりである。(それで修行僧は)「では、(なんと)さっきの鹿は(私をお救いくださるために)観音さまが化身として靈験を示しておいになつたのだつたか」と気付いて、先ほどの事情を村人たちに話して聞かせると、(人々も)胸を打たれて切ないほど有り難いことだと皆で思つていたときに、修行僧は、(感動と申し訳なさとのために)泣かんばかりの気持ちで観音さまのすぐ前に詣でて(次のように)申しあげる。「もしも(先ほどのできごとが)観音さまのなつたことでしたら、(どうか)もとのお姿にお戻りあそばしてくださいませ」と繰り返してお願ひしたところ、(その場の)人々の目の前で、(観世音菩薩像は欠けていた両ももが)もどどおりの姿にふくらんで戻つたということだ。

- (一) ア〓この鹿は観音さまが私にお与えくださったものであるようだ。
 イ〓私はどうしてもこの肉を慌てて食べることはできない。
 エ〓お坊さまにはお召し上がりものもないだろう。
 オ〓あなたさまはどうやってこの数日を過ごしておいででしたか。
 キ〓あんたは柱でも割り削って食べておけばよかったのに。
- (二) ウ〓僧自身の後悔している、煩惱から肉食した破戒の行為。
 煩惱に抗しきれずに肉食を犯して、戒律を破った行為。(別解例)
 カ〓村人の軽蔑する、僧が食糧として仏像を損壊した行為。
 僧侶として最も尊崇すべき仏像を食べるために傷つけた行為。(別解例)
- (三) それでは、さっき私が食べた鹿は観音さまが私を救おうと化身して靈験を示していらっしやっただなあ。

出典：間宮陽介『市場・公共・人間』／東京大学 94年

文章略解

すぐれた都市とは、人々の生活に活気と安定感とを与える「場所」である。しかしながら、最近では消費社会の発展に伴い、本来は生活の一部であったはずの消費が生活全般を支配するという逆転現象が生じてしまっている。このため、都市においても人々の暮らしは生活の全体像とのつながりを失い、都市はもはや「場所」ではなく単なる消費のための物的基盤、「土地」となりつつある。本来の「場所」としての都市を取り戻さねばなるまい。

解答

- (一) よりよく暮らすための様態までもが物として売買されていること。
- (二) 本来は生活の一部であるはずの消費が生活全般を支配すること。
- (三) 都市が消費一辺倒になり、人々の暮らしにおいてその場所との全体的なつながりの意識が失われてしまうこと。
- (四) 人々がさまざまにその場との全体的な関係を意識し、活気と安定感のある多彩な暮らしを営むことのできる場所。
- (五) a 〓 講 b 〓 浸透(滲透) c 〓 帰結 d 〓 劣化

(一) 傍線部分の直前に「消費と生活とは区別がつかないほどに同一視されることになった」(16行目)と述べられていることに注目すれば、この部分で筆者の言わんとすることの性質が推察できよう。要は「本来、『消費』と『生活』とは区別されるべきであるのに、最近ではその両者の区別がなくなってきた」ということだ。こう読んでくれば、傍線部分における「余暇や教育」が、「生活」に相当するものであることがわかるだろう。したがって解答の大筋は「『生活』に属するものが『消費』の一環になってしまっていること」ぐらいになるろう。

しかしながら、この「消費」「生活」なる語は、この問題文の中では筆者独自の意味合いをこめて用いられている。それは次段落にあるように、「消費」＝「物を使い尽くしたり、食べたり飲んだりすること」(19行目)・「生活」＝「場所の占め方のさまざまな様態」(21行目)ということになる。この点を踏まえて、前述の「解答の大筋」の「生活」「消費」それぞれを言い換えてやればいい。解答欄が一行なので、それほど多くの情報は織り込めまい。

(二) これについては、傍線部分の直後の記述「生活のほうで消費の一環となってしまう」が手がかりになるだろう。これを裏返せば、本来「消費のほうが生活の一環」だったのである。これは前段落の冒頭の一文に「消費という活動ももとはといえば……生活する」との一環であった」(27行目)と明快に述べられている。解答にあたっては、このあたりの記述を踏まえて「消費と生活の本来の関係」を指摘し、その上で、傍線部分の直後に述べられている具体例を抽象する形で「生活の「コマ」が「消費の一環」になっている旨の指摘があればいいだろう。解答例ではこれを「消費が生活全般を支配する」と言い換えてみた。

(三) この傍線部分のポイントはカギカッコつきの「生活」なる語の意味を明確に説明するところにある。カギカッコなしの生活は、一般的に言われているような意味、つまりは「暮らし」の意味でいいだろう。対してカギカッコつきの「生活」には筆者独自の意味がこめられているものと解せよう。これについては(一)でも引いたが、「場所の占め方のさまざまな様態」(21行目)、あるいは「場所への関わり全体が住まうことであり、生活することの意味なのである」(25～26行目)などの記述が手がかりになる。このあたりの記述をまとめれば、「単に場所を占めるだけでなく、その場所との様々な関わりを持ちながら生きていくこと」ぐらいになるうか。要するに「暮らす場所との全体的な関わりを意識して生きること」＝「生活」(カギカッコつき)なのである。したがって、解答の

骨組みとしては、この「生活」が都市に生きる人々から失われている……という状況の指摘があれば基本的にOKである（あるいは、31行目あたりの記述を使ってこの部分を「それぞれの行為を全体の中に位置づけながら生きること」ぐらいに言い換えてもかまわない）。

あとは、傍線部分にある「蒸発」を引き起こしたファクターを添えてやればいい。これは傍線部分の前の内容「都市が消費の舞台になっていること」（37行目）や前問の解答内容などを踏まえればいいだろう。要は「消費」のみを考える世の中になっている旨の指摘があればいいのだ。

④ 直後に「場所としての都市」とあるところが手がかりとなる。筆者はこの問題文の中で、「生活」―「消費」とパラレルな対概念として「場所」―「土地」を示している（46行目）。この対概念を筆者のモチーフに沿って読み解くなら、「土地」⇔「消費」の対象（つまりは物として金銭的に売買されるもの）、「場所」⇔「生活」をするところ……ということになる。だとすれば前問③で説明した「生活」（カギカッコつき）をするところである旨の指摘があれば基本的にOKである。

あとはこの「場所」という語について、筆者が説明を加えた部分を軸に肉付けを試みればいい。「活気と安定感を与える」（1行目）・「多彩な綾」（39行目）・「多様性に満ちたもの」（44行目）・「善き生活を営むこと」（49行目）などから、「多彩で活力のある暮らし」ぐらいのニュアンスが導けていれればいいだろう。

なお、「土地」とは違う旨の指摘があってもかまわないが、二行というスペースの制約を考えればこの要素は不可欠ではないだろう。

現代語訳

(菩薩女御を除く) 九百九十九人のお后たちは第一から第七にあたる宮廷に集まり、(自分たちに子が無いのに、大王の寵愛を受けている菩薩女御が懐妊したことについて) どうしたらよいかと(顔を見合わせて) 互いのため息をおつきになっている。ぜひこの(菩薩女御の産む) 王子の前世からの宿縁の善し悪しを知ろうと(思っ)て、ある占い師をお呼びになって、この王子の宿縁をお聞きになった。「菩薩女御の懐妊なさった子は、王子か姫君か。また(その子の) 前世からの宿縁の善し悪しを占い申し上げよ。いぶかしく思われる」と(お后たちのお言葉が) あったので、占い師が、書物を開いて申し上げたのは、「菩薩女御が) ご懐妊になったお子様は王子でいらっしゃいますが、(この王子の) 御寿命は八千五百歳です。(この王子が位にお就きになると) 国土は安泰で、そのとき、すべての人々がみな(煩惱から解放された) 無礙の境地で精神的に満ち足りた(暮らしを送るようになる、この上ない徳を備えた) 王者であるはずです」と占い申し上げた。(それを聞いた) お后たちが占い師におっしゃったのは、「この王子の御事(について) は、大王の御前で(今から) 私たちの言うとおりに占い申し上げよ。褒美は(お前の) 望み通りにしてあげよう。この王子は、(この世に) 出現なさって七日といえは(「七日後には」、九足八面の鬼神と化して、(自分の) 身体から火を出し、都をはじめ、この世すべてを焼き尽くすでしょう。この鬼神は三色(の姿) で、身の丈は六十丈に倍する(「六十丈の二倍」)でしょう。(このままでは) 大王は(その鬼神に) 食われなさるに違いありません」。また言うには、「鬼波国から九十九億の鬼王がやってきて、大風を起こし、大洪水を起こして、天下すべてをみな海(のように水浸し) にしてしまうに違いありませんと(大王に) 申し上げよ」と(言っ)て、(お后たちは) それぞれ(自分の) 身分に応じて、褒美を占い師に授けなさった。(その褒美は) ある人(「お后) は金五百両、ある人は金千両である。それだけではなく、綾や錦の(織物の) 類(の褒美) も莫大(な量を与えたの) である。(褒美をもらった) 占い師は喜んで、「(ご命令は確かに) 承りました」と(言っ)て答え申し上げた。お后たちは「ああ畏れ多い、決して(このことを口外するな)」と(占い師に) 口止めをなさった。占い師は「どうして(口外するなというご命令を) 違えましようか(いえ、そんなことはしません)」と強調した(「誓約した」)。

中一日あって〔二日後〕、(菩薩女御以外の九百九十九人の) お后たちが、大王の御前にあがって、口をそろえて申し上げなさるのは、「お后〔菩薩女御〕のご懐妊のこと(について、お生まれになるのは) 王子とも姫宮とも(わからないのでそれを) 知りたい(と存じます)。早くお聞きしましょう。占い師をお呼びになってよろしいでしょう。あまりに(それが気がかりに) 思われるものよ」。時(大王も) もつともなことだとお思いになって、例の占い師をお呼びになる。お后たちは、(占い師に) お命じになった菩薩女御の御産のことを、どういう子だと申し上げよと言ったものの、(占い師が) 約束を破るだろうと、それぞれの心中は全く鬼のようである〔占い師が約束を破るのではないかと疑心暗鬼になっている〕。占い師は(運勢・吉凶などを記した) 書物を開いて(並んでいる) 項目を見申し上げると、(生まれてくる) 王子の宿運の素晴らしいことは申し上げるまでもなく、(母親の) このお后〔菩薩女御〕のご年齢はどれほどかと申し上げると、三百六十歳と思われた。そのまま占い師は(書物の) 項目にしたがって見ると、(あまりのありがたさに) 涙もまったく止まらない。これほど素晴らしくていらっしゃる王子(の宿運) を、(実際と違う) 不吉な様子に申し上げるよくなことのつらさよとは思ったが、(九百九十九人のお后たちとの) 約束の通り(鬼と化して不幸をもたらすと) 占い申し上げた。大王はこのこと〔占い師の言葉〕をお聞きになり、「この輪廻の理に支配された世で、自分が生まれてくる王子の) 親となり、(生まれてくる王子が自分の) 子となることは、偶然としてもめつたにないことだ。現世(の因縁) 一つではない〔前世からも深い因縁がある〕ことだ。(それに) 今まで(自分の) 子という者をまだ見たことがない。どんな鬼としても生まれて来たら来たでよい〔鬼として生まれてきててもよい〕、親と子と自然と知って〔親子であると実感して〕、(その子を) 一日でも見た後にどのようにならぬようなことは構うまい〔二どのようにならぬとも構うまい〕と(言っ)て、(占い師の言葉を) お用いにもならなかった〔歯牙にもかけなかった〕」。

解答

- (一) ア 生まれる子の前世からの宿縁の善し悪しを占い申し上げよ
イ どうして口外いたしましたでしょうか、いや、決して口外しません
- (二) 占い師をお呼びになって生まれてくる子が王子か姫君かをお聞きになるのがよいでしょう

(三) 生まれてくる子が鬼と化して災厄をもたらすと占う約束。

(四) オ これほど素晴らしくていらっしやる王子の宿縁を、不吉なものと申すようなことのつらさよ

カ 偶然としても滅多にないことだ

キ 一日でもその子を見て後にどのような結果になろうと構うまい

解説

(一) ア 言うまでもなく、傍線部が菩薩女御の懐妊を嘆く他の后たちが「相人」に生まれてくる子について質問している会話文の中に
あることを前提とする。「相人」の「相」とは、現在でも用いられる「手相」「人相」の「相」で、外見に現れた、そのものの運命を
示すもの、という意味の語である。傍線部の「相す」という動詞も「相」に「す」が接続したサ変動詞である。つまり后たちは「相
人」―占い師―に菩薩女御の懐妊した子について占わせようとしているわけである。「果報」という語は、本来過去の行為を原因と
して現在受ける報いのことを意味する。「因」に対する「果」、「業」に対する「報」である。善悪いずれをも意味し、現在もっぱら
よい方の意味で用いられる「果報は寝て待て」という言葉から単純に意味を考えるべきではない。したがって、占う対象である「果
報のほど」は、「前世からの宿縁の善し悪し」などという意味である。あとは、誰の「果報のほど」かを補い、謙讓語補助動詞「申す」
(ここでは命令形になっている)に注意して訳せばよい。

イ 「いかでか」連体形」で疑問・反語、「たてまつる」が謙讓語補助動詞、という二点は非常に基本的な事柄。「違ふ」は連用形
で「違へ」となっているので下二段活用動詞で、当然「何を」を補うべき。問題はそれをどのように判断するのだが、傍線部の直
前で后たちが「口秘しめ(口止め)」している点から、「口外しないように」という命令」と判断する。あとは「べし」の意味だが、述
語「違へたてまつる」の主語が「相人」自身、つまり一人称である点から、「意志」と考えてよい。

(二) 何を「聞こしめす」のかだが、傍線部を含む会話文の冒頭から傍線部の直前までで「后(菩薩女御)の御懐妊のこと、王子とも姫
宮ともいぶかし。早く承らん」と言っているので、「生まれてくる子が王子か姫宮か」であると簡単にわかるだろう。「相人」は(一)ア
でも説明したように占い師であり、「べし」は主語が二人称(后たちの大王に対する会話文で、「聞こしめすべし」の主語は大王)な

ので「適当・勧誘」と判断できる。あとは「召す」が「呼ぶ」の、「聞こしめす」が「聞く」の尊敬語である点に注意して訳す。

(三) 傍線部直前に「菩薩女御の御産のことを、何の子ぞと申せと言ひながら」とあり、逆接で傍線部につながっている点から、「約束」の内容は「相人」に対して后たちが命じたことと考えるのが妥当。すると本文前半の「我らが言ふままに相し申せ。……この王子は、生じたまひてはく大王食はれたまふべし」「鬼波国より九十九億のく一天をばみな海と成すべしと申せ」の部分がその具体的内容ということになる。ただ、この部分をそのまま使うと解答欄に入りきらない長さになるので、簡潔に言い換える必要がある。二つ目の会話文で「相し申せ」と言った内容は、「子自身が鬼となる」こと、「この世がすべて焼失し、大王もその鬼に食われる」の二点にまとめられることができ、二つ目の会話文で「申せ」と言う内容は「大風・大洪水」である。したがって、「子自身が鬼となる」と「大災厄をもたらず」という風に簡略化できる。あとは「約束」の内容の説明なので、后たちの命令「相し申せ」「申せ」から、「(大王の前で) 占うという約束」などとまとめるとよい。

(四) オ 単語としてそれほど難しいものがあるわけではないが、「あらぬ」は少々注意が必要。基本的には「(事実・実際のありようとは) 違った」という意味の語で、そこから「(普通と違って) 異様な」「望ましくない」などの意味が派生した。ここでは后たちの命令に従って生まれてくる王子の宿縁を、大王の前で悪く占ってみせることをいうので、「不吉」などの訳語を用いるとよいだろう。あとは「申す」の対象が「君(王子)」自体ではなく彼の「宿縁」であること、「申さん」の助動詞「む」が連体修飾の形で「婉曲」の意味であることなどに注意して訳す。

カ 「ありがたし」は「有難し」の字面通り「滅多にない」が基本の意味。ここは「親となり、子となること」についての言であり、当時の人々の一般的な発想や本文の話の内容から、前世の因縁による輪廻転生という、人知の及ばぬ理によって親子となることについて「たまたまもありがたし」と言っていると判断できる。したがって「たまたま(偶然)も」の部分は、人知ではその必然性が理解できない、というニュアンスを活かした訳し方をするのがベター。

キ 語として特に難しいものはない。「苦し」は現代語と同じ意味と、「差し障りがある」「不都合」などの意味がある。ただ、この傍線部は、「見て」の対象「生まれてくる子」を補って普通に訳しても意味の通る表現にならない。ポイントは「ともかくも」。現代語でも用いられる語だが、明確な形で訳すのはかなり難しい語である。「と」「かく」はいずれも指示副詞で、「ともかくも」で対

立する両者のどちらでもよい、というのが基本の意味。傍線部の直前に「いかなる鬼とも生まれ来らば来れ」と、命令形の「放任」の用法がある点から、この「ともかくもならんことは」は「鬼となるという不吉な占いが当たろうが外れようが」「結果としてどのようなことになるうが」などという意味であると判断できるだろう。なお、命令形の「放任」の用法は、「さもあらばあれ」などの慣用表現にも出てくる基本的な知識。